

令和6年度 特選コース

第1回 入学試験問題 (2月1日 午前)

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

一 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、常夏トシの島に移住する。
- 2、一切トクの責任を負う。
- 3、神の化身カミとなる。
- 4、日本は極東キョクトウの国だ。
- 5、父が会社カイシャを営む。
- 6、シユシヤシユシヤ選択をせまられる。
- 7、世の中にカクメイカクメイを起こす。
- 8、ヨウシヨウシの整った人。
- 9、大きなソングイソングイを受ける。
- 10、すっかり日がククれる。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

麻生アソウ人生じんせいは二十四歳のフリーターである。高校生の時、いじめにあつて不登校になり、引きこもりになってしまった。大好きだった祖母マーサさんからの年賀状には、余命数ヶ月でもう一度会いたいと書かれてあり、人生は祖母に会いに行く。しばらくしてマーサさんは認知症になつてしまつた。

そう口をはさんだのは、(注1)つぼみだった。

(注2)田端たはたさんを警戒してひと言も口をきかなかつたのに、ばあちゃんに呼応こたへするかのようになり、田端さんの言葉に反応したのだった。

「おばあちゃん、もと通りになるのかな」

消え入りそうなか細い声。田端さんは微笑んで答えた。

「そうだね。そう信じて、話しかけてあげるといいよ」

いくら話しかけても、一生けんめい尽くしてあげても、無反応。介護をする家族にとって、それがいちばん辛いことに違いない。どうせ治らな
いんだから、話しかけるだけ無駄だ。そんなふうと考えてしまうのが、介護する側にもされる側にも、実はいちばんよくないんだよ、と田端さん
は言った。

「君たちが、おばあちゃんに笑いかけて、おばあちゃんの大好きなことを話してあげて、そしていつも『ありがとう』って言い続けたら、それは
絶対におばあちゃんに伝わるはずだよ。もうもとは戻らない、とは決して考えずに、具体的に、現実的な希望をひとつでも持つことが大切なん
だ。どんな小さなことでもいい。明日目が覚めたら、おばあちゃん何か話してくれるかも、笑ってくれるかも、ってね。おばあちゃんの田んぼ
でお米がとれたら、おにぎりを作ってくれるかも、とか」

どんなことでもいいんだよ。普通の人にとっては、別にどうってことないかもしれないけど、君たちにとっては、こんなことがあったらいいな
あ、と思えるような、小さな希望で。

人生は、田端さんの一言一句に、^①自分の耳が、心が震えるのを感じた。

具体的で、現実的な希望。小さな希望。

そうだ。おれ、おばあちゃんの作ってくれるおにぎりが食べたい。おばあちゃんは、おれが梅干しを苦手なことをちゃんとわかってくれていて、味
噌とか佃煮つくだ煮とかを入れてくれた。ごろんと大きくて、しつとりと海苔が巻いてある、あのおにぎり。

いまはもう、どんなに望んでも、食べられなくなってしまったおにぎり。

同時に、人生の脳裡のうりに浮かんだのは、母が作ってくれたおにぎりだった。

かつては、母が漬けた梅干しを入れたおにぎりが何よりの好物だった。いまとなつては、あのおにぎりもまた、二度と食べることはできないの
だ。

たったひとつのおにぎりは、たとえどんな高級レストランに行っても、決して手に入れられないものになってしまった。

「おれ、おばあちゃんのおにぎりが食べたい」

人生は、無意識に、そうつぶやいた。

「でもって、おれも、自分で作ったお米で、おばあちゃんにおにぎりを作ってあげたい」

志乃しのみさんの隣に、身を隠すように座っていたつばみが、「あたしも……」と、また消え入りそうな声を出した。

「あたし、料理、下手だけど。毎日作っても、全然、おばあちゃんみたいに上手になれないけど。でも、あたしもいつか、自分のお米で、おばあ
ちゃんに、おにぎりを作ってあげたい……」

志乃さんと田端さんは、目を合わせて微笑んだ。田端さんは、「そう。そういうのが、いいんだ」と明るい声で言った。

「それ、すごく具体的に、現実的じゃないか。決してかなわない夢じゃない。がんばれば、きつと手が届く」^②「希望」だ」^③ そのとき、ばあちゃんが、大きく、こつくりとうなずいた。人生とつぼみは、^③ 目を見開いてばあちゃんを見た。ばあちゃんは、小舟でも漕ぐように、もうひとつ、大きくうなずいた。けれど、やはり、目は虚ろだった。

囲炉裏に掛かっていた鉄瓶の湯でそば茶をいれ、そのまま、皆で話しこんだ。

田んぼ作り、米作りのためには村人たちの好意に甘えなければならぬ。特に、田植えは格別に変だ。ばあちゃんは、近所の田植えが終わって一、二週間後に「自然の田んぼ」の田植えをすることになっていた。この時期は、農家の人は目が回るほど忙しいのだから、ばあちゃんもひどく気を遣っていたようだ。

「でもまあ、若い衆たちも、^④ マーサさんの田んぼは特別だからって、結構楽しんでたみたいよ。たった一反だから、みんなやればそんなに負担じゃなかったしね。何より、田植えが終わったあとに、この家で酒盛りするのが、米作り期間の『中締め』みたいで、楽しかったんじゃないかな」

そう言つて、志乃さんは思い出し笑いの顔になった。

六月には、雨で崩れてしまう畦の修復をしたり、シカよけを作ったりする。「この辺に住んでる人間の数より多いくらいだからね」と、志乃さんはア真顔で言った。

七月には、三日に一度、田んぼの草取りをする。イ農薬を使わないから、ウ雑草がどんどん伸びてくる。稲との生存エ競争で、稲よりも強くはびこる草だけを選んで、手で引っこ抜く。稲よりも先に朽ちてしまう草は、そのまま枯れて田んぼの養分になるので残しておく、という手法だ。

「これが結構大変。ひよつとすると、いちばん大変かもね。この辺でも真夏は暑いし、陰のまったくない田んぼの真ん中で、草の種類を見分けながら引っこ抜いていくんだから……まあほんと、まったく、マーサさんもようやるわ」

九月には、徐々に稲穂が実つて、重たく頭を下げ始める。この時期には鳥よけを田んぼの周辺に張り巡らせたり、かかしを作つて立てたりする。スズメやイノシシが稲穂を狙つて到来するのだ。イノシシ対策には人の気配がいちばんということで、何人かの村人たちが集まつて、寝ずの番をする夜もある。そんなとき、いままでは、ばあちゃんの家には一晩中人の出入りがあり、ちよつとしたお祭りのようだった。囲炉裏では芋汁が準備され、甘酒がふるまわれる。酒を飲んで寝こんでしまつては元も子もないので、あくまでもアルコール抜きで。ばあちゃんは思い出話に

「なんだか特別なイベントみたいっすね」

人生がわくわくして言うよ、

A

「今年はあるがそのイベントの主権者になるんだからね」

志乃さんに釘を刺されてしまった。

そして、十月。ついに、稲刈りのときを迎える。

その年の気候にもよるが、豊作の年は黄金色の稲田が目にも鮮やかに美しく輝く。いちめんに実った稲田の風景は、まさに圧巻だ。

通常であれば、稲刈り機で効率よく刈り取って、みるみるうちに田んぼを裸にしていく。が、ばあちゃんの田んぼはそうはいかない。最後まで手作業が原則なのだ。カマで刈り取り、束にして、稲木と呼ばれる木製の棚に穂を下にして掛けていく。これを「稲架かけ」という。

「それ、見たことある。Bの、ちっちゃい屋根みたいなのでしょ?」

つぼみが言うと、志乃さんが、「そ。これがBじゃないと、農家の人は悲しいわけ」と言った。稲が実らなければ、Cになるのだから。

「この稲架かけの瞬間が、毎年、いちばん嬉しい瞬間ね。ああ、今年も実ってくれた、ほんとによかった、ありがとうってね」

志乃さんがDと言う。「ありがとうって、誰に言うんすか」と人生が訊くと、

「決まってるでしょ、お米によ。実ってくれてありがとう、ってね。自然とそういう気持ちになっちゃうんだな、これが」

志乃さんの答えに、「ああ、それはよくわかるなあ」と田端さんが相槌を打った。

「なんだか、無性にありがたい気分になるんだよ。ほかの野菜の収穫のときでも、もちろんそうなんだけど……やっぱり、お米は特別だね。生きてる証っていうか。自然と、命と、自分たちと。みんな引つくるめて、生きるほくら。そんな気分になるんだ」

へえ、と人生は思わず声を漏らした。

生きるほくら。なんだかヘンテコだけど、そうとしか言いようのないフレーズ。その言葉が、ふっと手を伸ばして、人生の心の表面にそっと触れた気がした。

「そうね。⑤ みんなで生きてるって感じ。マーサさんの田んぼは、耕さないし農薬も使わないから、ミミズやカエルやゲンゴロウとか、生き物がたくさん棲息してるの。ちゃんとう食物連鎖が起こって、命のリサイクルがあつてね。みんなて手を結び合つて生きてる感じが、いっそうするのよね」

ふむ、と田端さんが、感じ入ったように鼻を鳴らした。

「雑草や害虫を殺さず、むしろ自然の食物連鎖や、生存競争に任せるっていう考え方なんだね。ユニークだなあ」

「普通はそんなふうにはできないね。手間がかかるのに収穫は少ない。商業的には成立しないわよ。マーサさんも、それは百も承知だったの」
それがかえって周囲の人の興味を誘ったようだ、と志乃さんは言った。

(原田 マハ「生きるほくら」より)

(注1) 「つぼみ」 …… 人生の父の再婚相手の連れ子。人生が訪ねた時にはマーサ婆ばあさんと暮らしていた。

(注2) 「田端さん」 …… 人生の清掃業務の派遣先で知り合った男性。

(注3) 「志乃さん」 …… 駅前のそば屋のおかみさん。以前からマーサ婆さんの面倒をみていた。

問一、——線①「自分の耳が、心が震えるのを感じた」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文章中の言葉を使って二十字程度で答えなさい。

それまでは思ってもみなかった、二十字程度したから。

問二、——線②「『希望』とありますが、『希望』が指し示す内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、ばあちゃんの田んぼでとれたお米で作ってもらったおにぎりを食べられる時がくること。

イ、ばあちゃんの田んぼのお米で作ったおにぎりに母が漬けた梅干しを入れる時がくること。

ウ、人生とつぼみの「ありがとう」という言葉がばあちゃんに通じる時がくること。

エ、人生とつぼみを作ったお米で、ばあちゃんにおにぎりを作ってあげる時がくること。

問三、——線③「目を見開いて」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、ばあちゃんが田端さんの言葉を聞いて肯定こうべいしたのがあまりにも意外だったから。

イ、ばあちゃんが田端さんの言葉を聞いてうなずいたことに違和感を抱いたから。

ウ、ばあちゃんが田端さんの言葉に大きく反応したことにたいへん驚いたから。

エ、ばあちゃんが田端さんの言葉にきつと反応するだろうと予想していたから。

問 四、——線④「マーサさんの田んぼは特別」とありますが、「特別」とはどういうことですか。その説明として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、マーサさんの田んぼは、一般的な農家では決して受け入れようとしないう特別な方法で栽培するものだということ。
- イ、マーサさんの田んぼは、一般的な農家の人が機械で行う作業も徹底的に手作業で行う特別なものだという事。
- ウ、マーサさんの田んぼは、一般的な農家で行う雑草駆除や害虫駆除を行わない特別なものだという事。
- エ、マーサさんの田んぼは、一般的な農家とは異なり、特別なものを扱う感覚で接しているということ。

問 五、——線ア「真顔」・イ「農薬」・ウ「雑草」・エ「競争」のうち、他と構成が異なる熟語じゅくごを一つ選び、記号で答えなさい。

問 六、Aにあてはまる慣用表現として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、言葉をにごし
- イ、花を咲かせ
- ウ、舌を巻き
- エ、色をつけ

問 七、BとDにあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|----------|----------|----------|
| ア、Bーからから | Cーごちゃごちゃ | Dーすつきり |
| イ、Bーふさふさ | Cーすかすか | Dーしみじみ |
| ウ、Bーぼさぼさ | Cーだぶだぶ | Dーごちゃごちゃ |
| エ、Bーふわふわ | Cーぺこぺこ | Dーつべこべ |

問八、——線⑤「みんなで生きてるって感じ」について、先生と生徒達が次のように話し合いました。I Ⅲ② にあてはまる言葉として最も適当なものをあとの語群から選び、それぞれ記号で答えなさい。

先生——「みんなで生きてるって感じ」とありますが、どういふことだと思いますか？

生徒A——お米を収穫する時に自然に「ありがとう」という気持ちになるのは、「自然と、命と、自分たちと。みんな引つくるめて、生きるほくら」という言葉がその答えではないでしょうか？

先生——その通り。よく読みとれましたね。みんなは、『手のひらを太陽に』っていう歌を知っていますか？「ほくらはみんな生きてる」から始まる歌なんですけど。作詞したやなせたかしさんは、みんなもよく知っている『アンパンマン』の作者として有名な人物です。

生徒B——歌は幼稚園の時に教わってよく知っているけど、『アンパンマン』の作者が作った歌とは知らなかったです。

先生——『手のひらを太陽に』を作詞した当時のやなせさんは、ひどい鬱^{うつ}状態で、生きがいを感^{かん}じられず暗い部屋に閉じこもっていたそうなんです。ふと手元にあつた懐中電灯を点^つけ、手のひらに当てると、光と指の境目の血管^{けっかん}が透^すけて見えた。「……あ。こんなほくでも、生きているんだ。」と思った。ここから「ほくらはみんな生きてる」「手のひらを太陽にすかしてみればまっかに流れるほくの血潮」という歌詞ができたそうです。歌詞に出てくる生き物を見ていくと、あまり光の当たらない地味な生き物が多いですね。

生徒C——ミミズ・オケラ・アメンボ・トンボ・カエル・ミツバチとかですよ？

先生——そんな生き物だって「生きてる」。生きてるもの同士という仲間意識を感じて「友達」という言葉を使ったのではないかと考えられます。

生徒D——問題文にもミミズやカエルやゲンゴロウが出てくるけど、『手のひらを太陽に』とは意味が違ふと思うんです。問題文と『手のひらを太陽に』の違いは、問題文は、I への感謝が起点となっているのに対して『手のひらを太陽に』は、「手のひらを太陽にすかしてみれば まっかに流れるほくの血潮」のフレーズに現れている通り、II への感動が歌われているんだと思います。

先生——登場する生物に向ける視点の位置も同様だよ。問題文にある「III①」や「III②」という言葉に注目すると、生き物たちも形を変えながら、いつか自分自身を形成する要素となるということへの感懐^{かんわい}が述べられているのではないのでしょうか。

【語群】

ア、生きてる証し
オ、命のリサイクル

イ、食物連鎖
カ、外なる生命

ウ、内なる生命
キ、自然なる生命

エ、不可思議なる運命
ク、手作業

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

『博士の愛した数式』を書いたのは、四年前のことですが、それを書くきっかけを与えてくれたのが藤原正彦先生でした。ある日テレビをつけていたら、NHK教育テレビの番組で、世界中の天才数学者の人生を藤原先生が語るといふ番組をやっていました。

先生の見た目は、ご存じの方もあるかと思いますが、何とかあまりロマンティックな感じではないと言いましようか(笑)、髪の毛がもやもやとしていたりします。しかし、数学者ですから当然頭の中身はもやもやしておらず、非常にAで、曖昧さを許さない、凡人には想像もつかない優れた能力をお持ちなのです。私はそれまで、そういう思考能力の優れた人、まして数学のような無機質なものを研究している人は、情緒的なものに対して冷たいんじゃないか、という先入観を持って見ていました。

B、たまたまその時はウイリアム・ハミルトンという十九世紀のアイerland人の数学者についての回だったのですが、その番組の中で先生は、^①ほとんど目に涙を浮かべんばかりの表情で、ハミルトンの悲恋について語っていたのです。「このハミルトンという数学者は非常に早熟な才能豊かな子どもで、美しい風景を前にして気分が高揚してくると、この美しさを英語ではとても表現できないと、ラテン語で即興の詩を作るような少年だったといえます。彼は十九歳のときに大金持ちの娘のキャサリンに恋をするんですが、そのキャサリンのお父さんに反対されて泣く泣く引き裂かれます。それからハミルトンは学問の方面に精進しまして、四元数という、数学の世界においては偉大な発見をします。散歩の途中にそのアイデアを思いついたハミルトンは、感動のあまり、橋の途中にその四元数の基本式をナイフで刻んだというんです。そのように数学の世界で偉大な業績を残しながら、彼はなお昔別れたキャサリンの面影が忘れられずに、四十五歳になったとき、いまではすっかり朽ち果ててしまったキャサリンのかつての家を訪れて、二十六年前に彼女が立っていたその床に接吻をしたんです」というふうに、先生がお話しになっていたのです。

まず、藤原先生の口から「接吻」というセンチメンタルな言葉が出てくるのが、意外でした。^②そこで私は、数学者に対して自分は間違ったイメージを抱いていたことに気づいたのです。

先生はまた、「数学が表す真理は、何事にも影響されない。物理的な影響も受けなし、永遠に真実でありつづける。百年経っても一億年経っても、人間が減んだ後も間違いなく真実であり続ける。そしてそれは到底人間の手では作り出せないものだ。だから美しいんだ」「たとえば、山の天辺に美しい花が咲いている。その花に手を触れたい、ただそれだけの願いを持って、険しい山道を一步一步登るように研究しているんです」とおっしゃっていました。

数学者たちは決して、無機質な対象を、無感動に研究しているのではなかったのです。そこにはとても人間味豊かな感情が存在していたのです。

そのことを、藤原先生の肉人的な魅力と言いますか、情緒の豊かさを通して教えられました。

③ それともう一つ意外だったのは、数学者たちがとても謙虚だということです。

C、「三角形の内角の和は一八〇度である。それは人間がそういうふうに住向けたからでもないし、人間の心が感じるからでもない。人間が生まれる前から、ずうっと世界はそういうふうにならされているんだ。ということは、人間よりもっと偉大な何者か、サムシング・グレイトによって、三角形の内角の和はどんなに小さな三角形も巨大な三角形も、すべて一八〇度になった。だから数学者は、偉大な何者かが世界のあちらこちらに隠したそういう秘密を、洞窟から宝石を掘り返すようにして見つけ出す、それが仕事だ」というふうに考えているんです。つまりそういう目に見えない何か偉大なものに対する謙虚な気持ち、跪く心を持って、世界の有り様を追求しているのです。

よくこういうことが言われると思います。「相対性理論は、^(注1)アインシュタインが発見しなくても、何年後かに別な人が発見しただろう。しかし、モーツアルトの音楽は彼が居なければ決して生まれなかった」と。D、「フェルマーの定理は、一九九四年にイギリスのアンドリュー・ワイルズという数学者によって証明されたが、ワイルズが証明できなくてもいざ誰か他の天才が証明できた。しかし、^(注2)ピカソの絵はピカソにしか描けない、ということでしょうか。

このように、数学者を含めた科学者の人たちが、ある特別な謙虚さをもって自分の仕事に当たっていることが、大変魅力的な点でした。以上のような出会いにより、私の数学に対するイメージは根底からくつがえされました。数学と耳にするだけで、自分には無関係と決めつけていたのに、そこに予想もしなかった不思議、驚きが隠れていたのです。すぐに私は、これは小説の題材になると直感しました。数の世界が、才能豊かな数学者たちが頭を垂れるほどに美しいものであるなら、その美しさを言葉で表現してみたい。というところから作品が生まれてきたわけです。

まず、数学者を登場させるとしても、自分自身に数学の知識がないのですから、数学者を語り手にすることはできません。そこで、その数学者を観察しながら、少しずつ触れ合いを深めてゆき、同時に数の世界の美しさに気づいてゆくような立場の語り手が必要になってきます。家族ではあまりにも密接すぎる、恋人ではまた生々しくなりすぎる、もっと適切な距離を保ちつつ、尊敬の念を育めるような関係はないだろうか……と、あれこれ考えました。

その時、ふと思いついたのが家政婦さんという職業です。家政婦さんなら、ずかずかと無遠慮に人の人生に踏み込んではいけません。それでいて現実的な生活の面では大きな役割を果たす。相手がどんな人格を持っていようと、とにかくすべてを受け入れ、耳を傾ける。しかも数学とは縁遠い職業でしょうから、きつと私自身が感じたのと同じ不思議と驚きに、心を揺さぶられるに違いない。^(注3) そうした思いの中から、数学者と家政婦さんという主要な登場人物が浮かび上がってきたのです。

当然、数学者の小説を書くにあたって、伝記や数学に関する簡単な読み物を手当たり次第に読みました。今までの自分なら恐らく手に取らな

かつただろうというような種類の本ばかりでしたが、全く退屈しませんでした。それどころか、^⑥読めば読むほど小説を書きたくてたまらない気持ちになつていったのです。『フェルマーの最終定理』も『放浪の天才数学者エルデシュ』も、そこに書かれていることのほとんどすべては事実であるにもかかわらず、私にはどれもがドラマティックで詩的なエピソードに感じられました。

(小川洋子「物語の役割」より)

(注1)「接吻」……………尊敬や愛情のしるしとして、相手のくちびるや頬などに自分の口をあてること。

(注2)「サムシング・グレート」……………「創造主」とされる人智を超えた偉大なる存在のこと。また、生命、自然、宇宙などの素晴らしさに、人智の及ばない何かを感じることに。

(注3)「相対性理論」……………二十世紀始めにドイツの物理学者アインシュタインが提唱した、時間と空間に関する物理学の理論。現在もこの理論の内容をもとに、物理学の多様な実験や研究が行われている。

問一、Aにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、規則的 イ、論理的 ウ、実用的 エ、具体的

問二、BとDにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、たとえば イ、つまり ウ、一方で エ、ところが

問三、——線①「ほとんど目に涙を浮かべんばかりの表情で、ハミルトンの悲恋について語っていたのです」とありますが、ここから読み取れることとして適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、偉大な業績を残した数学者ハミルトンの、結ばれることが叶わなかった昔の恋人を三十年近く想い続けたという意外な一面を紹介している。

イ、かつての恋人を長年想い続けた数学者ハミルトンの純粋さに心打たれ、思わず泣きそうになってしまう藤原先生の豊かな情緒を物語っている。

ウ、偉大な数学者でありながら、昔の恋人への想いとらわれ続けたハミルトンの弱さを理解し寄り添おうとする、藤原先生の人間的な魅力を象徴している。

エ、五十歳近くになるまで昔の恋人を想い続けたハミルトンと、彼の想いに心を震わせる藤原先生という二人の数学者の、人間味あふれる様子を伝えている。

問四、——線②「そこで私は、数学者に対して自分は間違ったイメージを抱いていたということに気づいたのです」とありますが、「間違ったイメージ」とはどのようなものですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、文章中から四十五字で探し、最初と最後の五字をそれぞれ抜き出して答えなさい。

四十五字
イメージ。

問五、——線③「それともう一つ意外だったのは、数学者たちがとても謙虚だということですが、「数学者たち」の「謙虚」な姿勢とはどのようなものですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、——線③より前の文章中から指定された字数で探し、最初と最後の三字をそれぞれ抜き出して答えなさい。

数学が表す真理とは、1、十四字ものであり、2、二十一字ものでもあるので、数学者の仕事とは自ら真理を発明しようとするのではなく、偉大な何者かによってすでに用意されたそれらを世界中から発見することにすぎない、と考える姿勢。

問 六、——線④「ピカソの絵はピカソにしか描けない、ということでしょうか」とありますが、これはどういうことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、数学者たちの発見に対して、芸術家たちの作品はそれぞれが唯一無二のものであるということ。
- イ、代わりが存在する数学者たちに対して、芸術家たちは一人ひとりが絶対的な存在であるということ。
- ウ、数学者たちが発見してきた偉大な真理よりも、芸術家たちが遺してきた作品の方が価値があるということ。
- エ、代わりがきく数学者たちよりも、それぞれが孤高の存在である芸術家たちの方が立場は上であるということ。

問 七、——線⑤「そうした思い」とは、どのような思いですか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、それぞれ指定された字数で答えなさい。ただし、1は文章中の言葉を使い、2は文章中から抜き出して答えること。

- 「家政婦さん」という立場ならば、

1、三十字以内

とともに、数の世界の美しさに気づき、自分と同じように数学者に対して
- | |
|------|
| 2、八字 |
|------|

のではないか、という思い。

問 八、——線⑥「読めば読むほど小説を書きたくてたまらない気持ちになっていったのです」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、才能あふれる数学者たちを惹きつけてやまない数の世界の魅力に触れ、小説家として創作意欲が駆り立てられたから。
- イ、偉大な功績を残した数学者たちのドラマ性に満ちた生き方に惹かれ、数学と縁の遠い多くの人たちに広めたくなったから。
- ウ、数学者たちの仕事に対する謙虚な姿勢に共感し、自分も一人の小説家としてなすべき役割を果たそうと思ったから。
- エ、数の世界に魅了される数学者たちに刺激を受け、自分は言葉の世界でまだ誰もしたことがない挑戦をしたと思ったから。

問題は次ページに続きます。

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

夕方のバス停でのこと。中学生らしき制服姿の女の子たちの会話が耳に入ってきた。「きのうさー、先生にさあ、ポロクソほめられちゃったんだ」^① えつと驚いて振り向くと、楽しげな笑顔があった。若者が使う表現は何とも面白い。

「前髪の治安が悪い」「気分はアゲアゲ」。もつと奇妙な言い方も^② 闊歩する昨今だ。多くの人が使えば、それが当たり前になっていく。「ポロクソ」は否定的な文脈で使うのだと、彼女らを論ずるのはつまらない。言葉は生き物である。

大正の時代、芥川龍之介は『澄江堂雜記』に書いている。東京では「とても」という言葉は「とてもかなはない」など^③と否定形で使われてきた。だが、最近はどうしたことか。「とても安い」などと肯定文でも使われている、と。時が変われば、正しい日本語も変化する。

今どきの若者は、SNSの文章に句点を記さないとも聞いた。「。」を付けると冷たい感じがするらしい。^③ 元々、日本語に句読点がなかったのを思えば、こちらは先祖返りのような話か。

新しさ古さに関係なく、気をつけるべきは居心地の悪さを感じさせる表現なのだろう。先日の小欄で「腹に落ちない」と書いたら、間違いでは、との投書をいただいた。きちんと辞書にある言葉だが、方もいるようだ。

新語は生まれても、多くが廃れ消えてゆく。さて「ポロクソ」はどうなることか。それにしても、あの女の子、うれしそうだったなあ。いったい何を、そんなにはめられたのだろう。

(朝日新聞「天声人語」より)

(注) 「かなはない」……「かなわない」と同じ。

問 一、——線①「えつと驚いて振り向くと」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から八字以上十字以内で探し、抜き出して答えなさい。

「ポロクソ」という言葉は、本来なら 八字以上十字以内 ものだから。

問二、——線②「闊歩する」とありますが、ここではどのような意味で使われていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、威張^{いば}って自由気ままに行動していること。

イ、間違ったことが好き勝手に行われていること。

ウ、勢いをもって広まっていること。

エ、周りを気にせず歩いていること。

問三、——線③「元々、日本語に句読点がなかったのを思えば、こちらは先祖返りのような話か」とありますが、これはどのようなことですか。

最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、冷たい感じを相手に与えないように、日本語は昔から句読点を付けないという習慣を保っているということ。

イ、句点を使わないという現代の若者の傾向が、句読点を付かなかった昔の日本人の性質に似てきているということ。

ウ、句点を避けたがる現代の若者の心理は、相手に居心地の悪さを感じさせないようにする日本人らしい性質だということ。

エ、現代の若者の句点を付けないという傾向は、句読点が存在しなかった昔の日本語と同じ状態にあるということ。

問四、にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、腑^ふに落ちない イ、胃^いに落ちない ウ、肝^{きん}に落ちない エ、背^せに落ちない

問 五、この文章の内容や表現の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、「ボロクソほめられ」などの現代の若者たちの表現を面白がりつつも、筆者は新聞記者として日本語の乱れを憂^{うれ}えている。
- イ、芥川龍之介が指摘しているように、新語の移り変わりが激しい現代に限らず、日本語の変化は昔から起こっていることである。
- ウ、新聞記事や小説を書く人は、読者が違和感を覚えるような表現ではなく、小学生でもわかるような表現を使わなければならない。
- エ、時代によって日本語の正しさも変わっていくため、「前髪の治安が悪い」などの若者の表現を間違いだ^{ちが}いと決めつけてはならない。

